

現代の伝道における立正安国の意義と実践

立正安国の精神の現代的把握

伊藤如顯（座長） それでは立正安国の現代的把握について問題提起を。

室住一妙 立正安国とは、「国を安んずるには正法をたてよ」という意味である。地球全体が破壊されるかどうか、という状態にある今日にあっても、「国」は単なる権力国家という国ではなく、この「国土」とみなければならないか。現代のような、ゆきづまっている社会を裁き、解決するのが正法なのであり、「実乗の一善」なのであると考へる。

だから、「立正」という場合の「正」は、ばくぜんとした正法であってはならない。「立正」の「正」は純粹化し先鋭化されねばならない。

今日只今、混乱せる王法の姿を自覚することによって、国諫、国民教化、成仏国、摂折を主要な内容とする仏法の輪に働きかけて、仏法に帰依し、王仏冥合して立正平和運動の大法輪を転ずる。そして立正平和運動より真の平和文

化（常寂光）運動となる。この王法（A）仏法（B）、立正平和運動（C）世界文化活動（D）の正軌の齒車をよくよく心得ていきたいと思う。

「如説修行抄」に曰く。

法華折伏破權門理の金言なれば終に權教權門の輩を一人もなくせめおとして法王の家人となし天下万民諸乘一仏乗となつて妙法独り繁昌せん時万民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば吹く風枝をならさず雨つちくれを碎かず世は義農の世となりて今生には不祥の災難を払ひ長生の術を得、人法共に不老不死のことわり顯れん時を御らんぜよ、現世安穩の証文疑あるべからざるものなり

と「修行抄」で出され、「開目抄」にて「この書の心は日蓮によりて日本国の有無はあるべし」「我れ日本の大船とならむ、等と誓ひし願破るべからず」と誓願をたてられ、「本尊抄」において、

今、本時の娑婆世界は三災を離れ、四劫を出でたる常住の淨土なり、仏、既に過去にも滅せず、未來にも生ぜず、所化以て同体なり、是れ則ち己心の三千具足三種

の世間なり、

と示される。こうした、己心↓個人↓社会↓国家↓国際↓
世界↓宇宙にいたる「本尊抄の世界」に立つて、「立正安
国論」における、

汝早く信仰の寸心を改めて速かに実乗の一善に帰せ
よ、然らば即ち三界は皆仏国なり、仏国其れ衰へんや、
十方は悉く宝土なり、宝土何ぞ壊れんや、国に衰微なく
土に破壊なくんば身は是れ安全にして心は是れ禪定なら
ん、この詞この言信すべく崇むべし

の精神の現代的把握をしなければならぬ。この観点から
戦争の功罪、靖国神社国営化への対処のしかた、国際間
における日本のあり方、国家をどうみるか、を考えねばなら
ない。自衛隊が全日空機を落とし、国民を殺したが、自衛
隊はこれに責任を感じないのか、という考えもでてくる。
要するに、知法思国、「仏眼をかつて時機をかんがえよ」

「仏日を用って国土を照らせ」という聖訓を信ずる、この
「信」こそが問題となる。

平元義雄 かつて宗祖が、王朝貴族政治から武士団の封建
社会に移る、その動乱の時代をまのあたりにされて、鎌倉
の天変地異、飢饉、疫病などをどういう風にとらえられ、
どういう風にその原因を糾明されていたか。その過程を
通じて、宗祖のおやりになった方法は、「鎌倉の民衆の苦
悩、苦しみがどんなものであるか」と、常に歴史的現実と

対決なされようとした、と私は思うのです。そしてこの苦
悶が何から起るものなのか、人間自身からくるものなの
か。これが宗祖の場合には、教義の問題になってゆくわけ
でありましょうが……。

それでは現代において、その民衆の苦悶とは一体何であ
るのか。それがどういう姿をもっているのでしょうか。宗
祖が原因を突詰められようとした、それと同じ態度でもっ
て、我々は現代の諸科学を使い、その機構を分析し得ると
ころまで分析し、そして、そこに問題があるのならば、そ
の問題の原点にまで進むべきものであると、私は考えてい
ます。

それでは、私が日常寺でやっている拙いこと、また、寺
で考えていることをお話いたしましたして、皆様の方から逆に
いろいろとご教示いただきたいと思っています。

私は東北の小さな田舎町の寺で生まれました。私の学生の
時はひどい農業恐慌の時代で、檀家の半分は農民、しかも
大部分は小作人でした。そしてとれた米の半分以上は地主
にとられる有様でした。農民にむかって、あなたは一体何
で困っているのですか、と問えば、「俺は貧乏で困ってい
る」と言うのがその正直な答で、何として親方に米を納め
たらよいかが農民の最大関心事なりました。種・糶・肥料
・農器具・労力などすべてを出し尽して米を作るが、その
半分以上は親方にとられてしまう。しかも、凶作のときも

まけてはくれない。まけてくれても、こんどはひどい利息をとられてしまう。仕方無いから、いろいろのものを売り飛ばす。仕舞には売れるものがなくなつて娘を売る。欠食児童が続出する。こういう悲惨な時代でした。これこそが現代の大きな苦悩であると思いました。鎌倉時代の民衆が非常に苦しんだのと同じ苦しみが、いまここにあるのだなと感じました。

そのうちに戦争が始まりました。そして、戦争が起らなければならぬ機構というものも、私なりにだんだん分つてきました。戦争はますますひどくなつてゆき、私は自分なりの努力を尽したのですが、もう個人の小さな力ではどうすることもできない状態に陥っていました。

やがて、長い大きな戦争が終結して、田舎の寺に戻つてきて、どうすれば日本の「再建復興」は成るかと、農民たちや、働くひとたちと一緒に活動をしてきました。

今日では日本の生産力は、自由国家の中で二番目であるとか、昭和元禄であるとか言われるようになり、物質の豊富な時代になりました。しかし、その豊富さの内にひどい貧困があるように、私には思えて仕方がありません。高度経済成長政策の裏側に多くの問題が含まれています。我々は、やれ観光ブームだ、車だ、スポーツだといろいろ面白可笑しい現象に目を奪われていますが、しかし、そういうことを払い除けてみますと、現在の日本は大変な事態にな

つていると思います。

まず、水も空気も日光も土も、何もかもみな腐つてきています。私のように田舎に住んでいまして、小川に小鮒が泳いでいる光景は、もう見られなくなりました。春になつても小鳥がこない。夏には螢が飛ばない。秋になつて、空いっぱいあの赤トンボも見えなくなっている。実に荒涼としたものです。川端康成氏がノーベル賞の記念講演の最初に、あれは道元禪師のお歌だったと思います、*「春は花夏ほととぎす秋は月、冬雪さえて冷しかりけり」*と述べています。たしか『美しい日本の私』という題だったと思いますが、問題は現在どこを見てもこの『美しい日本』が無くなつてしまつていふと言うことです。私の友人に音楽美学を専攻しているものがありますが、ある時、「ベートーヴェンとかモーツァルトの作曲した作品よりも、私は虫の声を聴いたり、小鳥の鳴き声を聴いた方がよっぽど感動するのだが、あなたの美学の立場から言うとうどうだろうか」と尋ねたことがあります。すると友人のいわく、「それはそうだよ。天然の美しい声にどんなにしても及ぶものはない」とのことなのです。しかし、現実にはそういう美しいものが、どんどんと破壊されてゆきます。

そしてまた、さらに恐ろしいことは、日本の国土や自然が荒されているばかりでなく、人間の心がひどく荒んできていることなのです。これは凶悪犯罪や、昔では考えられな

かった犯罪が非常に多いことでもお分りでしょう。

さきほど、長谷川部長さんの方からお話がありました。私も情報産業のことを少し調べてみたことがありますが、情報産業とはテレビ・新聞・雑誌・ラジオなどによって、情報が入ってくることでそれ自体が主ではないのです。むしろ、それによって人間の欲望を刺激して、次から次へと新しい欲望を創造することを主体としているのです。我々仏教者には常に欲望を極限まで抑えてゆきたい気持がありますが、情報産業のうちには、逆にその方面の欲望を刺激して、買わせて儲けようとする機構が含まれているのです。これは一つの精神公害であると言ってもよいでしょう。

その他、人間疎外、親子の断絶、人間不在など種々の問題があります。我々は人間であることに誇りをもっていたのですが、いまのひとは人間を動物の進化したものものぐらいにしか思っていないのです。人間と動物の間の一つの差と言うものを、抹消して考えているのです。ですから、行動から何からも動物的なのです。

このように、この世の中のものすべての機構は正常ではありません。自然が破壊される。戦争の準備が進む。親子の情愛はまことに冷たいものになる。交通戦争が起る。このことを我々はもっと賢明に見極めて、少なくともそれに踊らされないようにしなければならぬのです。

それには、「生きるとは何か」をもう一度問質す必要があります。言葉を変えて言えば、あなたの本質は一体誰ですか。あなたは何のために生きてきたのですか。と言うことなのです。日本には八〇〇以上の大学があるはずですが、その大学の学者でも学生でも、これらの間に明確な答えのできるひとは、恐らくひとりもないと思います。それらに対して我々宗教者には、はっきりと示してあげる義務があると思うのですが。

自然破壊、人間疎外など種々の現代の病根のひとつに、明治初年から始った学校教育の影響があると思います。私はソ連からヨーロッパまで歩いたことがあります。どの国で聞いても、宗教の時間が大体三時間ある、と言うのが揃った答えでした。ソルボンヌ、ケンブリッジ、オックスフォードなどの大学の構内にはチャペルがあって、そこでお祈りをしてから授業が始まる。そこにはキリスト教精神がその中心にあって、立派なジェントルマンになることを基本として授業が行われています。日本では明治維新以後、その基本がなくなってしまうのです。亀井勝一郎氏に『歌を忘れた伊藤博文』と言う論文があります。それは、過去の歴代天皇は沢山の方が僧籍に入っていたらしい。また、封建的な領主、大名でもそう言う教養はもっていた。ところが明治維新の政治家には、まったくそれが

ない。そこを皮肉って亀井氏は『歌を忘れた……』を書いた。学校教育を受ければ受けるほど、「宗教性」「聖なる世界」と言うものに価値を認めない。元奈良女子大の数学者、岡潔氏は「日本人の心をとり戻すまで、三〇〇年かかるだろう。ところが三〇〇年もかかったら、人類は恐らく滅んでいるだろう」と警告されている。東大医学部の高橋博士も「薬公害の上からも、人類は滅びるであろう」と言っている。人類が減びるかどうかと言う危機の時代に生きて、我々宗教者のやるべき仕事は実に尊い、実によい仕事だと思えるのです。

座長 つづきまして、社会伝道への姿勢と実践について、とくに公害問題の把握とそれに対する教化の基本姿勢と方向に関する問題提起をお願いします。

立正安国と公害問題

近江幸正 長谷川部長もおっしゃったように、公害と戦争というものが、我々の生存を脅している二つの悪魔としておい被さっています。これは重大なことだと思えます。ともすると、我々は戦争が起きそうだと聞いたり、公害が大変だと聞いても、まだ他人のこのように思っています。私、池上に長く住んでいますから、長谷川部長さんなどよりも大分、免疫性や耐久力ができているはずですが、それでも一年中セキが切れるということがありません。お

そらく、池上に住んでいる他のお寺の方もそうであろうと思います。しかし、公害はそれほど切実な問題として認識されているわけではありません。私自身を考えてみしても、本当に自分が切実な問題だと思っているのか、と質問してみますと、どうもそこまでは明確に言えません。我々生きている人間は、今日は生きているのだから、明日も生きているのだろうと考えます。今日公害で人類が絶滅しないのだから、明日も大丈夫であろうと。まあ、それだからノイローゼにもならず生きてゆけるわけですが。しかし公害については、あまり呑気なことを言っていられないのです。もっともつと危機的にとらえられなければならない問題なのです。公害は比較的最近、問題になって来たことですが、世界中どの国でも、特に資本主義の国で最大の問題になっています。しかも、社会主義の国にとっても、これは軽視することのできない問題になってきています。その意味からも、やはり工業が高度に発達した現代の最大の問題だと考えられます。ただ、その追放とか防止について、最近マスコミなどで騒がれるようになり、また政府でも環境庁などを作っているいろいろな対策をたてているようですが、公害というのは、産業革命以来、つもりつもりで来た遺産なので、単なる対象療法的な方法だけでは駄目です。科学技術や経済学の根本的な再検討が要求されているわけです。

宗教者としての我々が、もう一度反省しなければならぬのは、なるほど、世俗はそういう具合だ、しかし、宗教はその世俗から離れた高度なものであるから、これでお前たちを救えるのだ、と本当に考えることができるかどうかと言うことです。まして、本宗は立正安国の遺訓からいって、国民の生命を脅し、国土を崩壊している公害を黙視できません。伝道教団とは、公害の問題に本当に取組んでいけるものでなければ、今日の伝道教団とは言えないのです。教団づくりを考えると、我々は公害の問題をもっとしっかりと把握しなければならぬのです。

それでは公害とは一体何かというと、これは申上げるまでもなく、技術の発達が人間と環境とに重大な影響を与えていることだ、と言えると思います。しかし、もう一つ考えられます。それは、企業の生産活動の中で、費用を節約することから生じた重大な社会的損失です。卑近な例ですが、家を一軒建てるとすると、今は昔に較べて騒音が非常に高い。これは建築技術が昔とは違ってきたためで、騒音が公害が起きやすくなっているのです。これは企業と無関係ではありません。公害対策基本法があるが、そこでは公害を規定して「事業活動その他、人の活動によって生ずる。そしてそれが相当範囲にわたり、人の健康または生活環境に被害を生じさせる」ものを公害としている。「その他、人の活動によって生ずる」とありますが、何よりも事

業活動だということは日本全体の常識として認められているのです。

一般的に公害といえば産業公害が第一にあげられます。そして、それは四日市とか神通川とか、非常にはつきりと分っている場合が多いのです。都市公害といわれるなにもその傾向があります。東京あたりではゴミ処理が大変な問題になっています。ことに東京ではいまにもゴミに埋まってしまうと訴えられている。これはひとりひとりのモラルの問題、あるいは自治体がうまくそれを処理する問題だと言われていますが、そればかりではなくもっと大きな問題があります。私ごとですが、私の寺の裏地にゴミ捨て場があります。町の人のためだからと思ってそれを許可していたのですが、捨てられてくるものがテレビの壊れたものとか、どんどん大きくなってゆく。最後には木戸は全面埋まってしまつて、ひとが入れなくなる仕末です。これでは困るので、町会のひとにお願いしたが、一向にちがいがあない。最後にはもうお断りだと喧嘩になってしまいました。そのゴミの出てくるのをみると、新しいものがどんどんつくられそれが売られる。すると仕方がないから、古いものを捨てる。その悪循環です。これはもう単にひとりひとりのモラルの問題じゃありません。やはり企業がものをつくり、それを売り出そうとしていることと無関係ではありません。ヤクルトで問題になりましたが、プラスチック

ツクスの容器も公害源になっています。政府ではあれを、「企業の方で処理すればよい」という条件で販売することを認めたようですが、これはおかしい話で、もともと処理をしなくて済ませるためにプラスチックにしたのですから、これはあとで処理するわけではないのです。これは処理段階の公害だと言えます。その他に、ものが作られる段階の公害があり、消費される段階の公害があります。いずれにせよ、そのもとは企業の生産活動から生じているのです。それでは企業の技術が発達すれば、必ず公害が起るのでしょうか。そうとは単純に言えないと思います。日本の場合をみますと、例えば非常に有害な大気が出る。しかもそれを出ないようにする技術は非常に遅れています。ものを処理しやすくし、あとでゴミが出ないようにする技術も遅れています。そして、むしろ有毒な物質の出る技術、処理しにくいものを作り出す技術ばかりが発達しているのです。しかし、長谷川部長もおっしゃったように、宇宙の生物の循環体系を破壊しないようにする技術も、現在の水準をもってすれば不可能ではないのですが、企業にすればそれをしたところで儲からない。逆にいえば、それをしてない方が儲かる。誰も儲からないことには金をかけません。ここに問題があるのです。

最近、日本では銑鉄産業が大変な成長を遂げました。新しくオーストリアで開発された技術によって、いままでの

約五〇倍の生産力をあげていますが、そのかわり五〇倍の有毒物質も吐き出しています。それはとめることができるのですが、それには莫大な金がかかります。せつかく五〇倍の生産力にして儲けているのに、とめてしまったら儲からない。儲からないからやらないのです。

しかし、他の国ではもう少し安くこの公害防止の技術が発達するまで、銑鉄用の平戸は使わないことにしています。このあたりに、日本がとくに最近、公害問題で騒がれる原因があるのです。いまの市場メカニズムからみると、空気、水などをきれいにするために大金を払うことは、非常に不合理なことで、うっかり自分のところだけでやると企業が潰れてしまう恐れがあるのです。そこで、公害防止関係の設備投資はできるだけ削ろうということになります。公害はこのような社会的費用を、不払いにしているから起るのです。最早公害は偶発的な事件ではないのです。東京などでは地盤沈下も大変な問題になっています。これは地下水の汲み上げすぎから起るのです。何故、地下水を汲むかと言うと、やはり地下水が一番安いからです。地下水には金を払わなくとも済みます。いままで、水や空気にはお金を払わないことが常識でしたが、それではいけないのではないかと経済学の方でも考えられてきています。いままでの私企業の利益のための経済学ではなく、公共経済学の確立が急がれています。財界人の内にもそのことを

いつているひとがいます。亡くなった倉敷レイヨンの大原総一郎氏も、公害問題に努力をなさったひとりです。「公害を起して他人の犠牲の上に繁昌しているのが今の自由経済だ。これはもう不正取引で、そればかりでなく、これはもう本質的に自由を破壊している。これは真剣に考えなくてはならない」こういう声が財界からもあがっているのです。しかし、まだまだそういう声は少数です。

公害は社会主義の国にもあることはあるわけですが、圧倒的に資本主義の国の方がひどい。どうしても資本主義国では、商品価値がないものに手を加えない傾向があるからですが、しかし、どうもそう大ざっぱに割切れないこともあります。資本主義国でも、日本と同じレベルの技術が発達しているスエーデン、ノルウェー、デンマークなどでは国をあげて、公害対策に取組んでいますから、我が国よりも少ない。アメリカは相当悪化していますが、それでも日本よりはましです。そういう意味では日本は急速に公害国家となりました。日本は朝鮮戦争の特需で儲けたのですが、これがいまの高度経済成長の基になっています。日本は当時、何もありませんでしたから、高度の重化学工業を発達させなければなりませんでした。エネルギー革新も進められ、石炭から石油に切り替わりました。これが現在の亜硫酸ガス公害の原因になったわけですが、それから日本は設備投資を続けて、現在の工業国になりました。とくに日

本の自動車は一九五五年に一五〇万台しかありませんでしたが、六九年にはアメリカに次ぐ世界第二位で、一五〇万台の自動車日本中を走り回っています。それがあたにかまわずに排気ガスをまき散らし、現在の深刻な排気ガス公害を生んでいるのです。

日本の場合の特徴のひとつに、国家が私企業と癒着して産業を進めたということがあります。とくに地域開発などはその代表的なものです。地域開発を行うとき、企業を優遇して公害のことは考えません。四日市の大公害などはその例です。やはり日本では、ただ生産ばかりでなく、国が公害に一役買っていることが指摘できます。昭和四十四年の五月の閣議で決定された「新全国開発総合計画」によれば大規模な工業地開発が進んでいます。これによりまずと、四日市が一千、水島コンビナートが三千四百、鹿島が三千三百、ところが青森の陸奥では三万三千、山口、九州の周防灘では三万五千の工業地区が作られます。これでは公害がもっとひどくなるのが目に見えます。これでは日本の国家が公害を野放しにしていると言っても過言ではありません。「新全総」の問題で実は驚いたことがあるのです。「新全総」関係者の多い集りに「如水会」というのがあるのですが、その晩餐会で大平正芳氏がこう発言されている。「『新全総』の企画に自分も参加したけれども、ビジョンも規模も相当の出来映だ。それにつけても公害の

ない日本を作ろうなんて言っている人があるが、私は反対だ。公害がなければ民族の抵抗力は弱まる。汚れた水も飲んだ方がいいし、汚れた空気も吸った方がいいと思う。そうでないと、無菌動物を培養するようなことになって日本民族は滅亡する」よくもまあ、こんなことが言えたものです。こんな考え方がる以上、公害はなくなりません。佐藤首相が公害について発言されたことを調べてみますと、その内容がだんだん変ってきていることに気がつきます。昭和四十一年には「政治の目標は人間のためにあるのだから、公害で健康や生命を害されることを放って置けない。私はどうしてお互いに真剣に取組まないのだろうと思う。人間のための経済発展なら人命を失うようなことを許しておいての、生産第一などというようなバカなことではない」これは非常に期待のできた言葉です。しかし、四十五年には、「現在の公害の主なもの、大気汚染・水質汚濁だが、いずれも発生源が不明確だ。特定の企業ならば責任をとらせることもできるが、不特定多数という例が多いので、非常に難しい。今日の日本の繁栄をもたらせたのは経済の成長にあるので、公害問題が発生しているからといって、経済成長の速度を緩めるわけにはいかない」と言っています。四十一年のときには公害の問題は大事だと言い、四十五年にはこういうことを言われたので、四選表明のときに記者から質問があったわけです。そのときに佐藤さん

がおっしゃったのは、「社会開発計画は確に充分に実効をあげなかった。これは言い出すのが早過ぎたからで、まだ国民がそういう問題が大事なことがわからなかったからであのとき、そんなことを言ってもみんなピンとこなかったんだ」これは前に言われたことと大分違ってきています。佐藤さんが悪いと批評しているではありません。佐藤さんははじめに公害のことをちゃんと考えていたのでしょうが、政治をやっていくうちに次第に変らざるを得なくなってくる、そういう日本の政治のあり方が問題なのです。我々が公害を考えるとき、こういう事実認識に即して、公害に対する取組み方を考えていかなければならないと思います。

公害問題と立正安国の関係をどういう風に考え、どう説明していったらよいか……。『立正安国』という言葉からいって「安国」が国土であろうと、国民であろうと、国家であろうと、公害はやはりなくさなければなりません。それではなければ「安国」なぞできっこないでしょう。そのためには正法をたてなければなりません。これが前提条件であります。本宗の教義——私は立正安国論から観心本尊抄というよりも、むしろ逆に考えた場合、我々の住む国土は仏国土であることが明かにされています。仏国土である我々のこの国土が、何故、実際には穢土なのでしょう。逆に読んでいけば疑問を抱かざるを得ません。そうすると、

御書でもそうですし法華経でもそうですが、寿命品にある「飲他毒藥」、他の毒藥を飲んだからだということになります。他の毒藥を、これを法華経以外の宗教と狭く考えますとそれまでですが、もっと深い意味をもつものでなければ、法華経それ自体がおかしなものになると思います。人間が生き方を見失ってしまうことを「飲他毒藥」と指摘されるのです。さらに寿命品を拝読してゆきますと、我々凡夫が根底的な反省をしないので、「憍恣の心を生じ、放逸にして五欲に著し、惡道の中に墮ちなん」と人間の未來を指摘されるわけです。公害だとか戦争だとかいうことも、この「飲他毒藥」でもって「憍恣の心を生じ」ているところにある根拠があるのです。宗祖の「立正安国」の構想にしましても、毒藥を飲んだひとびとや國を救うための行動であられます。だからこそ、そこに國家諫曉が行われたのです。優陀那日輝師は『立正安国論』は失敗の書であると言われましたが、宗祖御自身は池上御入滅のときまで、安国論の講義をなされたのですから、これは単に出発点であったばかりでなく、本尊抄を核にしたところの最後の言論、帰着点であったとも思えるのです。

我々の教団、または教師ひとりひとりの生き方をみていつたとき、我々の教が質的變化をきたしてはいないでしょう。口でこそ「立正安国」を唱えるわけですが、ともすると、これはすべての宗教がそうですが、個人の内面だけ

の問題にしてゆく傾向があります。個人の内面から出発して社会に向かうことがないのです。もし個人の内面だけの問題で、それが社会に向かわないということであるならばそれは、事の一念三千を超越的、抽象的、觀念的世界にとどめてしまふでしょう。

最近、本宗の責任のある方がある会合で、「公害の問題は大事な問題だ。しかし、企業を誘致することに非常に熱心になっていたひとたちが、公害がおきたからこんどは出て言け」と言う。こういうエゴイズムでは公害の問題も解決されないだろう」とおっしゃった。それがエゴイズムであることは確かなことですが、どちらのエゴも一緒にしてしまつてよいのでしょうか。企業のエゴから公害がおこります。それによって自分はひどい目にあった。これを何とかしろ、とこれもエゴイズムです。同じエゴかも知れませんが、本當に被害を受けて生命、人命を守りたい一心からギリギリの叫をあげているものと、同じエゴイズムで片付けてしまつてよいものでしょうか。これでは「立正安国」になりません。一昨年、いま座長をやっておられる伊藤上人が、四日市の問題を、四日市の住民の立場から発言されていました。やはり、我々ひとりひとりが公害運動との関連を、あい昧にしたままでは駄目なのです。伊藤上人のようにはっきりさせた上で、近代の価値観を克服する思想を打ちたてなければならぬのです。そういう立場から、

企業の方へも我々から働きかけなければならぬと思うのです。

公害に対していろいろの反対行動がありますが、最近とくに、これは社会の発展の結果なのだ、産業社会が必然的にもたらしたものののだ、と極端な議論、思想が出てきました。産業社会の中で人間の否定的な思维の力が全くなくなってしまうって、社会に同質化してしまっている。だからもう人間がそれを変えて行く力を失ってしまい、社会にはそれを解決する力がどこにもないのだ。人間を信頼することとはできない。と、文化、社会、人間などを全部否定する思想的な行動があります。ヒッピーなどがそうです。体制編入的な保守から脱して、自由社会的グループによる合理的行動をとろうという考え方が出てきています。私はこういう考え方のあることを大学紛争、沖繩協定問題、などあらゆる場面に聞いています。しかし、そういう思想と行動は結局ヒステリックになるだけで、アナーキーなものに陥入らざるを得なくなってきました。公害をなくすためには文明を否定すると彼らはいっています。電気も使わない、電車にも乗らない。こうなってくると我々はもう現代の社会に生きていられません。こういう極端なことでは何も解決いたしません。

現代社会では皆がバラバラにされていますし、体制に同化されるような情報盛んに流されていますので、内から

も外からも管理されているようですが、決して人間は完全に管理されてはいけません。例えば公害についても、あれはエゴイズムなのだと言われますけれども、その中から命を守らなければいけません、という議論も起きてくるのです。我々はそのに依拠しなければならぬと思います。教義的にみても、浄土教的な末法観に立つならば、衆生にかけらの仏性もないということですから、そういう考え方は馴染みやすいでしょう。しかし、久遠実成を説き、一念三千の教義をもつ本宗では、本来、そういうものを否定するのです。我々が公害に対する実践、末法的な種々の社会思想に対する実践を考えるとき、しっかりと教義を思想化していく必要があるでしょう。我々が教義を現代に生きる思想としなければ、アナーキカルな、あるいはニヒリスティックな思想が若い教師と信徒をとらえてしまい、教団の混乱と崩壊が生じることも充分に考えられます。我々が拱手傍観している間に、問題意識をもったひとびとがそうなってしまうことを恐れるのです。

戦争と公害、この二つの問題に対して我々はどういう態度をとるか。ということの一つの契機にして、我々は教団、教学に対して根底的な検討を加えるということにしなければ、御降誕七五〇年というこの時期に、宗祖の精神を生かしてゆくことはできないかと思ふのです。

座長 それでは討議を行なっていきたいと思ふます。

中濃教篇 とくに室住先生の問題提起を中心に、私の所見をお話したいと思います。教学の大家であられる室住先生の御発言は、非常に重要なものが含まれていると思います。私のように違った角度からものをみたり、ある種の行的なものややってきたものにとつて、先生と違った観点をもたざるを得ませんのでその点を申し上げて、皆さんから現実に即したご討論をいただきたいと思います。まず私が気になりましたのは国家についてのお考え方です。立正安国論の原本における国の字の使いわけについて、これがどういう形で日蓮聖人の御遺文の内に表われてくるかについては、先生はお触れになりませんでした。私は庄候的に多い文字として「口内に民の字」をお使いになっていることを考えてみる必要があると思います。戸頃重基氏のように「民」だから民衆を重視したというのも大人げないと思いますが、それを見直してみることは賛成です。「国」よりも「口内に民の字」に関心をおもちになったことは間違いないと思います。ですから立正安国の国というのを、いきなり「帝王の国」だけに考えるのには問題があります。日蓮聖人がお使いになった「国王、国主」という考え方は非常に不統一であるわけです。あるときは天皇を指し、あるときは執権を指す場合があります。いずれにしても天皇だけを国主といわれていないことは明確な事実です。天皇だけを国主として、折伏の対象、正法を広める対象とされ

てはいないのです。立正安国論が、北条時頼に上書されている点からもそれはいえると思います。それから、今日の討論の伏線として、あえて質問したのですが、「神様が天上にいつてしまふ。善神が国をすてる」ということを再三再四いわれているわけですが、それをどういう風に考えられているかが非常に大切だと思います。靖国神社を考へるとき、必然的論理的につながつてくるし、それが基本になりますから質問をしたわけです。

私の考え方を申し上げますと、立正安国論の一節、「夫れ国は法に依て昌え、法は人に因て貴し。……先ず国家を祈りて須らく仏法を立つべし。」これをいまだに立正安国論のご精神がそこに集約されていると受けとらうとする。これは戦争中のものを読んでもみましても「客」の言葉であるといわれ、戦後は「客」の言葉であつて「主人」すなわち日蓮聖人のお言葉ではないとされています。立正安国論の一番の重点は「汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ。……」の一文なのです。室住先生は長谷川師のいわれた「国というのは権力国家ではなくて国土なのだ」ということに疑問を出されました。しかし、あそこで長谷川師のいわれたのは「権力国家」とあえて「権力」をつけていわれたのです。私はその考え方のほうが現代的把握として大事ではないかと思うのです。「国家を祈りて須らく仏法を立つべし」という考え方を、我々はもう一度立

正安国論を読み直してみても「客」の言葉に対して日蓮聖人はどういう風にお答えになり、どう結論をお出しになったかを、皆さんと一緒に考えておく必要があると思います。

玉川覚祥（神奈川）昨日、長谷川伝道部長から「公害を起している企業は、加害者だ」というお話がありましたがその公害企業から社運隆昌の祈禱を求められた場合、我々はそれを断わるべきでしょうか。それとも怨親平等の立場からそれを受けて社運隆昌を祈るべきでしょうか。これは現実に関切な問題なのです。これに態度をはっきりさせなければ、例えば国がどうのこうのと話しても空論になってしまうと思います。私は実際に、名前は出しませんが、ある日本一の兵器産業から地鎮祭を求められたわけです。そして、社運隆昌も祈りました。それから家に帰りまして、大学の博士課程に学んでいる友人といろいろ話したわけですが、そのうちに「はたして君のやったことは日蓮聖人の教えからみて、一体よいのかどうか」と質問されたのです。私はそれに対して返事につまづいてしまいました。ひとつ皆さんの忌憚のない具体的なご意見を拝聴したいと思います。

武内龍泉（和歌山）私は身延の行堂にいました修法師です。修法師としていろいろ頼まれることがあります。公害が出そうな企業からまだ頼まれたことはありません。しかし、もし頼まれたとしたら授受の立場から受け入れてご

祈禱をしてあげます。ただし、願いはあくまでも公害の出ないよう、それだけの設備を整えるよう、ご祈禱するわけ

です。

平元義雄（秋田）恐らく、私にはそういう企業からは依頼がないと思いますが、もし依頼があったとしたら、五〇歳前だったらそんなところに行けるかと断ったと思います。五〇歳を過ぎたら円満な態度でいかなければならないと考えて、ある新聞に「五〇の弁」というのを書いたことがあります。それからひとに温和な気持で接するようにしています。ですから、いままら引き受けると思います。ただし、私のところでやる以上、会社がどんな悪いことをしているのか自覚して欲しい、懺悔してもらいたい。そういう意味のことをいって、会社がそれでもいいというのならば行くと思います。

座長 ベトナム問題についてはどうですか。仏教界で救援運動もやられた話を聞きましたが。

中濃 ベトナムの仏教会のなかで、チ・クアン師たちの仲間が仏教会を統治しているが、その師があるひとにこう言ったことがある。「ベトナム難民の救援といったら、日本では募金をしていただいているが、それをベトナム政府にお渡しただきたい。それが全然どこえいってしまいか、わからない。全部が個人のポケットマネーとして消えてしまうから、そういうことはして欲しくない」こういう

ことです。南ベトナムの仏教会に直接送っても同じような問題があります。仏教会には二つの派があり、そのうちの一派は政府の権力を背景にしていますので、政府の特別な配慮があって救援品はそちらにもつていかれてしまっています。仏教徒の大部分を把握しているチ・クアン師派には、それがいかないという問題があります。

もう一つ、ベトナム救援活動と言いますが、それが南北を一緒にして行われているかと思うとそうではない。北ベトナムのほうは、私たちも北京で北ベトナムの代表に会ったことがあります。お手伝いをしましょうか」と言うのと「私たちは私たちでやりますから、結構でございます」との返事なのです。「戦闘が激しくなったら、医薬品などを送ってもらいたいが、それも無理におやりになることはありません」北ベトナムではこう考えているわけです。

「難民救済」と一口に言いますが、その難民をつくり出しているのは一体誰でしょう。救援活動は大切ですが、それはうっかりすると、難民をつくっている戦争をやめさせようという考え方よりも、ただ単に難民だけを救いましょう、という結果に陥入る場合もあります。ヒューマニズムの立場から救援は正しいのですが、慎重に考えていかなないと逆に政治に利用される可能性もあります。

堀田泰宣（京都）昨日、室住先生から「立正安国の精神の現代的把握」につきましてお話がありました。確かに日

蓮聖人のお立場からは「法華折伏破権門理」でお通しになって、そのお教えを我々は現代に受継いでいるわけです。

「破権門理」のほうが宗門を團結するうえに力があると思えますが、しかし、いまの社会で例えば「全日仏」との関係がどうなるか。その点を中濃先生にお伺いしたいと思います。

中濃 非常にむずかしい問題だと思います。個人的考えを申し上げますと、ある目的のために他の宗派のひとたちと行動するのはいまの時点ではやらざるを得ないし、やることに正しいと思う。例えば、公害問題について企業のほうが申入れをしましょう、というときオレは日蓮宗だから、門徒とは一緒に行動できないというのはおかしい。ただ、そのことと信仰問題を一緒にしてしまつて、何でもかんでも仲良くやろうというのではありません。そのところの差別が非常に大切だと思います。

山田勝義（千葉）米に農薬を使わなければよいというが、それでは経済的に問題が生じます。また、自然農法ということも考えられるが、歳費のことがやはり問題になってきます。奈良県の五条市では実際に自然農法をやっているそうです。自分どころも農村寺院で、檀家のひとびとの大半が農家なので、ただお説法をするだけではなく、自分も一緒に自然農法を考えてみたいと思います。このことについて、実際問題としてどう対処し

ていったらよいか、どなたかお示し願いたいと思います。

平元義雄（秋田） 適格な答えになるかどうかわかりませんが、私の町は秋田県の米どころにあります。私の町から三〇分ほどのところに大曲という市があります。一昨日その市長さんとお会いする機会があったのですが、そのとき市長さんのお話では、「私のところに自然農法をやっている家がある。何か宗教と関係があるらしいが、化学肥料をやらない、殺虫剤をまかないという信念をもっている。今度私のところでも自然農法で毒を含まない米を作り、これを販売しようと思う」と言っておられました。現在は自然農法による米が多少高くとも、それを買いたいというひとは沢山あると思います。それで採算が充分間にあえば結構だと思えますが、市長さんの考えでは、採算がとれないようなら市のほうでそれを補償してもよいというお考えのようでした。そこまで政治を動かしてゆく力があれば、問題は大変簡単だと思えます。有害なものを作らなくとも、政府あたりがそれを補償してくれて、欠損のないようにする。そういう方向にもっていくのも一つの方向だと思えますが、實際上、政治をそこまでしていくのは大変な困難をとまいます。それにもうひとつ価値観の問題で大分違ってくると思います。有害なものを作って、人がそれを食べて病気になっても、経済的効率がよければそれでよいのだという価値観ではなくて、たとえ儲からなくても人に害毒を与え

るものは作らないという、仏教的な価値観。私はそこまでいってほしいと思うのです。

遠藤要顕（新潟） 新潟では阿賀野川の水銀中毒による公害があります。これは昭和電工の廃液によるものです。また柏崎の北に原子力発電所がつくられるということで地元の漁師は反対しています。いったい具体的にどのような被害があるかを聞いてあるきましたが、もっと地元の人の中に入って聞くだけでなく、一緒に考えていきたいと思っています。

堀田 京都でも自動車の排気ガスで平等院の鳳凰堂のツリガネや鳳凰が腐蝕しており、国宝級の仏像、仏具も被害をうけています。こういった公害問題に対して、どう働きかけていくか、具体的な活動をどうするか、を考えるべきでしょう。例えば、現宗研や宗務当局が公害の実態を調査して、反対の署名運動をやるとか、抗議集会を開くとか、大企業の政党への政治資金を規制とかを考えるべきではなかろうか。

座長（伊藤如頭） 四日市は公害病患者が現実によく出ており、おまけに企業経営者から住居を立ち退かざるをえない状況に追いつめられている。同苦の精神に立って地域住民と連帯することが大切だと思う。